ヘブル語聖書における 「笛」「フルート」の釈義的考察⁽¹⁾

An Exegetical Note on “Pipe” or “Flute” in the Hebrew Bible

竹内茂夫^{*}
TAKEUCHI Shigeo

ABSTRACT This paper aims to re-examine three Hebrew words in the Hebrew Bible which are usually translated as “flute” or “pipe”. First, *’ûgāb* (attested four times in the Hebrew Bible and once in 11QPs^a/11Q5), could in fact refer to a chordophone rather than to an aerophone, since in the Septuagint it is rendered as *κithara* “lyre, harp” on one occasion, whilst it occurs twice as *ὄργανον* “tool” and a further two times as *ψαλμος* “song (sung to the harp), psalm”. In addition, words clearly referring to chordophones such as *kinnôr* “lyre” or *minnîm* “stringed instruments” are always found paired with *’ûgāb*. Secondly, *nəḥîlôt* (attested once) occurs as *’el-hannəḥîlôt* with the preposition *’el-* “to (ward)” and the definite article *haC-*. It is said that its meaning is “difficult” or “uncertain.” Even so, it has been translated as “flute” from the supposed Hebrew root *ḥ-l-l* like *ḥālîl* or as “inheritance” from the *n-ḥ-l* found in the Septuagint. Although the meaning of *nəḥîlôt* itself remains open to question, *’el-hannəḥîlôt* as a whole may refer to the incipit of an unknown tune. Thirdly, *ḥālîl* (attested five times) is translated as *αυλος* “double-pipe” in the Septuagint. This meaning is quite plausible as there are archaeological evidences of existence of the double-pipe in the Syria-Palestine area. It is not unlikely that the fairly modest number of attestations of words referring to ‘flute’ or ‘pipe,’ (less than 10 in the Hebrew Bible) is due to the fact that such words are easily associated with erotic or intoxicating objects, rather than with musical instruments such as these were known in Egypt and Greece.

I. はじめに

ヘブル語聖書には楽器が約20種類現れるとされている。このうち、ダニエル書のアラム語部分に現れる約7種類の楽器は別にして、ヘブル語部分に現れる楽器について概観すると、「シンバル」と訳されるメツィルタイム *māšiltáyim* (13回) やツェルツェリーム *šēšālîm* (3回) のような体鳴楽器 ⁽²⁾ idiophone, 「タンバリン」「太鼓」と訳されるトー

* 京都産業大学文化学部准教授

Associate Professor, Faculty of Cultural Studies, Kyoto Sangyo University

フ *tōp* (15回。うち1回は動詞) のような膜鳴楽器 *membranophone*, そして「琴」「立琴」と訳されるキンノール *kinnôr* (40回) やネーベル (・アーソール) *nēbel* (*‘āsôr*) (27回) のような弦鳴楽器 *chordophone* が比較的数多く登場するのに対して、管鳴楽器 *aerophone* としては「角笛」と訳されるショーファール *šōpār* (66回) や「ラッパ」と訳されるハツォーツェラー *hāšōšrā(h)* (31回) が主に招集などの合図として用いられる他には、いわゆる「笛」「フルート」と訳されている語は10回程度しか現れない。しかも、それらの「笛」のうちのあるものは、笛の類ではないのではないかという指摘すらなされている。

本稿では、邦訳聖書において「笛」「フルート」と訳されているヘブル語の用語が何を指しているかを釈義的に再検討し、あわせてその登場がなぜ少ないかということについても考察していきたい。本稿で取り上げる用語は、ウーガーブ *‘ūgāb*, ネヒーロート *nəhīlōt*, ハーリール *hālīl* である。

II. ウーガーブ

「ウーガーブ」という語は、ヘブル語聖書においてわずか4箇所にしか現れない語で、邦訳聖書において次のように「笛」と訳されている(邦訳聖書の引用は、特記以外新改訳第3版より)。

「その弟の名はユバルであった。彼は立琴と笛を巧みに奏するすべての者の先祖となった。」(創世記4:21)

「タンバリンと踊りをもって、／神をほめたたえよ。／緒琴と笛とで、／神をほめたたえよ。」(詩篇150:4)

「彼らはタンバリンと立琴に合わせて歌い、／笛の音で楽しむ。」(ヨブ記21:12)

「私の立琴は喪のためとなり、／私の笛は泣き悲しむ声となった。」(ヨブ記30:31)

新改訳聖書以外の例えば新共同訳、関根新訳、旧約聖書翻訳委員会訳においても「笛」と訳されている。

ヘブル語聖書以外の資料では、死海文書(前2-後1世紀)に含まれる詩篇151篇(151A[11Q5/11QPs^a])において、ウーガーブは立琴(キンノール)と対語で現れ(*ydy šw wgb wšbwtly knwr*「私の手はウーガーブを造った、そして私の指は立琴を」[私訳]), “flute” と訳される一方で(García Martínez and Tigchelaar 1998, 1179; Abegg *et al.* 2003, 546), “an instrument” (Abegg *et al.* 1999, 585) とともに訳されている。

七十人訳(前3-1世紀)を見てみると、創世記ではキタラ *κιθάρα* “lyre, harp” (Bauer 2000, 544), “lyre” (Liddell and Scott 1940, 950), 「キタラ」(秦 2002, 35。その箇所の注

36に「弦楽器」とある), 詩篇ではオルガノン *opyavov* “tool” (Bauer 2000, 720), “instrument, implement, tool” (Liddell and Scott 1940, 1245), ヨブ記では2箇所ともプサルモス *ψαλμος* “song of praise, psalm” (Bauer 2000, 1096), “mostly of musical strings, the sound of the cithara or harp, song sung to the harp, psalm” (Liddell and Scott 1940, 2018) のように様々である。また, 死海文書の発見以前から知られていた詩篇151篇では, 詩篇150篇と同じくオルガノンとして2節に現れる。

その他の古代訳は後4世紀以降になるが, いくつか見てみると, タルグム (アラム語訳) では常にアップーバー *'abbūbā* “read-pipe, [vertical] flute” (O'Connell 1997, 334)⁽³⁾, ウルガタ (ラテン語訳) では常にオルガヌム *organum* “an implement, instrument, engine, Of musical instruments, a pipe, Of hydraulic engines, an organ, water-organ” (Lewis and Short 1879, 1278)⁽⁴⁾, ペシッタ (シリア語訳) では創世記ではキナーラー *kinārā* “lyre”, 詩篇ではハルヤター *ḥalyatā* “flute”, ヨブ記21章ではメーネー *mēnē* “string”, ヨブ記30章ではゼマーラー *zəmārā* “music” (O'Connell 1997, 334) のように訳されている。

ウーガープは, 伝統的には, “flute, pipe [...] Prob. derived from base, *ʿgb*, hence lit. meaning ‘instrument of love’” (Klein 1987, 465), “(long) flute” (Koehler and Baumgartner 2001, 795), “some kind of woodwind instrument” (Montagu 2002, 15) と理解され, 「様々な形態の笛 [...], 双管の縦笛 [...], 今日のクラリネットに似た吹口のある縦笛などが, 種々の呼称で知られていた」(『旧約新約聖書大事典』269) 楽器のうちに含まれるとされる。また, 創世記にはヘブル語聖書における「最初の」楽器として立琴とともに現れ, 「古代日本音楽の『コト』と『フエ』のように弦楽器と管楽器の総称として見られることもある」(水野 1997, 31-32) という指摘もされている。さらに, パンパイプと見なす解釈の他に, パンパイプを元に前3世紀にエジプトのアレキサンドリアで発明された水オルガン *hydraulis* とする見解もある。水オルガンは後2, 3世紀頃のパレスチナにおける図像資料からも知られており, タルムードにおいてもウーガープはオルガンと解されているようである (Braun 2002, 32)。

一方で, 最近ではウーガープを弦鳴楽器と見なす見解もあり (*Encyclopaedia Judaica* 12, col. 565; 『旧約新約聖書大事典』269における追記; O'Connell 1997, 334; 水野 1997, 32, 71), 弦鳴楽器のキンノールと並行対語で現れることからそれが示唆されるとする考えもある (Jones 1992, IV, 938)。

しかしながら, 古代イスラエルとパレスチナの楽器についてまとめたブラウンも様々な可能性を挙げるに留め (Braun 2002, 32), 菊池は「これが管楽器なのが, 弦楽器なのかについて議論の決着をみていません」(菊池 2003, 97-98) と述べ, エヴェン・ショジャンのコンコルダンスでは「古代の楽器 *kly ngynh qdmwn*」とするのみであり (Even-

Shoshan 1989, 837), ミッチェルは同定するには証拠不十分としている (Mitchell 1992, 131)。

ヘブル語テキストを見ると、ウーガーブは常に弦鳴楽器と共に現れ、4箇所のうち3箇所は1つの節の中で立琴(キンノール)と対語で現れる。七十人訳や死海文書に見られる詩篇151篇においても、立琴と対語で現れている。もちろん、立琴と対語で現れていることによって、ウーガーブがただちに管鳴楽器ではなくて弦鳴楽器を指していると考えすることは早計かもしれない。もしかすると水野(1997, 31-32)が述べているように、ウーガーブが管鳴楽器であって、弦鳴楽器である立琴と共に起することによって楽器を総称しているという考え方もあり得るだろう。

また、ウーガーブと音との関連について次のような指摘もある。ヨブ記21:12に「ウーガーブの音(あるいは声 *qôl*)」という表現が出てくることから、笛の方がふさわしいという意見もある一方で(私信)、「立琴の音」という表現がエゼキエル書26:13に現れる。また、ウーガーブの「ウ」という母音が擬音語(オノマトペ)として笛と結びついているのではないかという見解もあるが(Braun 2002, 32)、むしろ笛の名称としては管によって出される音からp音あるいはf音を持つ言語が多いという指摘もあるので(黒沢 2005, 135)、積極的な支持とはならないように思われる。

ヘブル語聖書における楽器の現れ方、とりわけ神殿礼拝における楽器の使われ方を見ると、歴代誌などに現れる神殿礼拝で用いられる楽器のリストにおいては、弦鳴楽器の立琴(キンノール、ネーベル)⁽⁵⁾、膜鳴楽器のタンバリン(トーフ)、体鳴楽器のシンバル(メツィルタイム)、管鳴楽器の中でもトランペット(ハツォーツェラー)や合図としての角笛(ショーファール)は現れるが、確実に笛の類と認定される楽器が現れる例は見られない。⁽⁶⁾

このようにヘブル語それ自体ではよくわからない一方で、ヘブル語聖書以外で最も古い七十人訳が、笛のような管鳴楽器を積極的に支持しているようには思われえないという点に注目したい。創世記でのキタラは明らかに弦鳴楽器を指し、ヨブ記におけるプサルモスは「賛美の歌」だけでなく弦鳴楽器を伴う歌を指しているようである。また、2つの詩篇に現れるオルガノンは単に「道具」「楽器」を表す用語である。さらに、創世記を含む五書は他の書物(預言者と諸書)より正確に翻訳されていると考えられており(秦 2002, 278-279, 315)、その創世記において弦鳴楽器のキタラとして訳されているのに対して、それ以外の書物においては特定の楽器を指していないような語で訳されている。こうしたことから、七十人訳ではウーガーブは楽器としては管鳴楽器ではなく弦鳴楽器として理解されていたように思われる。

以上のような検討から、ウーガーブは管鳴楽器というよりは弦鳴楽器の可能性が支持

されているのではないだろうか。ただし、弦鳴楽器であったとしても、古代イスラエルからも様々な図像の資料が出土している立琴のようなリラ属の楽器であるのか、それともハーブ属（あるいはリュート属？）なのか、あるいは弦鳴楽器全般を指すのかまでは特定できない。

III. ネヒーロート

ネヒーロートは、詩篇5編の表題に「エル＝ハ・ネヒーロート *'el-hannāhîlôt*」としてただ1度だけ現れる語である。新改訳第3版では

「指揮者のために。フルートに合わせて。ダビデの賛歌。」

のように訳されているが、管見では「フルート」という邦訳をあてているのは新改訳のみである。新共同訳では

「指揮者によって。笛に合わせて。賛歌。ダビデの詩。」

のように「笛」と訳され、旧約聖書翻訳委員会訳、関根新訳、月本訳も同様である。

ネヒーロートについては、デリッチの注解書 (Delitzch n.d., 120) に端的にまとめられていると思われるので、それを元に検討していきたい。

まず、語根 *nhl*「相続する」との関連から、「相続」あるいは「相続人」というよく知られた旋律の歌い出しかもしれないと言われている（すなわち、ローマ聖歌や中世のモテトゥスなどのインチピト incipit）。このように、よく知られた旋律（世俗曲）に別の詩（宗教詩）を載せた「替え歌」は、中世欧州音楽においてはコントラファクトゥム *contrafactum*（8）として知られている。「相続」については、七十人訳 *υπερ της κληρονομιας* (κληρονομωю「相続する」の現在能動分詞女性単数属格形) やヘブル語の2つの写本によって支持される。

旋律については、タルムードに見られる「群れ」すなわち「蜂の群れ」（アラビア語 *naḥl*）という俗謡、蜂の羽音に似た旋律、あるいは蜂について歌った歌ということも指摘されている。

次に、ネヒーロートはネヒッロート *nāḥîllôt*「くりぬかれたもの」と等価であって、笛の特別な名前と見なされている。これは、第IV章で扱うハーリールと同じく語根 *hll* から派生したと見なしているようである。上述の邦訳聖書の他いくつかの注解書が支持する（例えば Kraus 1988, 27）。以上が、デリッチによる見解のまとめと、それに対する補足である。

笛については、もし仮に笛の類であったとしても、管見では新改訳に見られる「フルート」から想像しがちな横笛ではなく縦笛であろうと思われる。古代の中近東においては横笛の証拠が見られず、最古の証拠はエジプトではプトレマイオス朝になって（ヴェ

ーグナー 1985, 112), ギリシアにおいても前4世紀(ヴェーグナー 1985, 56)である。

また、文字の読み替えを伴ってネヒーロート *nahólót* 「病気(に対して)」とする見解も見られ、その場合前置詞をアル *'al-* と解して「病気に反して」としているようである(例えば Clines 1993-, 655)。

ネヒーロートの語形そのものに関しては、管見では議論が見られないようであるが、語尾のオート *-ót* については一見女性複数語尾に見える一方で、女性単数形語尾という説もあり(Bauer and Leander 1922, 506)⁽⁹⁾、もしそうであれば定冠詞「ハ」も含めて七十人訳における現在能動分詞の女性単数形と対応するかもしれない。

次に、前置詞にエル *'el-* 「へ(向かって)」がこの箇所使われていることに注目すると、少数のヘブル語写本ではアル *'al-* 「の上に、について、に反して」が現れ、エルをアルの変異形(Briggs and Briggs 1906-1907, lxxvii)と考えて、「ネヒーロートの上で」とする見方もある。詩篇92篇4節(邦訳3節)の「十弦の琴や六弦の琴、／それに立琴によるたえなる調べに合わせて」において、「合わせて」と訳されている語がアルである。

この点に関してデリッチはまた興味深いことを述べている。すなわちアルよりもエルがふさわしいと思われるのは、歌い手は笛を同時に吹くことができずに、他の人の演奏に対して歌うのみだからである、としている。すると、ネヒーロート「に対して」⁽¹⁰⁾「に向けて」とするのがふさわしいのかもしれない。

しかしながら、楽器「を用いて」という時に現れる前置詞は、ほとんどがベ *be-* 「で、を用いて」であって、エルが現れる例は他に⁽¹¹⁾見られない。そうであれば、仮にネヒーロートが「笛」だとしても、「笛」という楽器「に合わせて」「を用いて」ということではなく、「笛へ向かって」という句を持つ旋律あるいはその歌い出しで始まる曲の旋律を使った替え歌なのかもしれない。

まとめとして、詩篇5篇の表題に現れる「エル＝ハ・ネヒーロート」は、前置詞と冠詞をも含む全体が未知の歌の旋律かその歌い出しを示しているのではないかという提案をしたい。すなわち、その中に現れる名詞ネヒーロートが仮に笛(それも横笛でなく縦笛)であったとしても、「『笛』に合わせて」ということではなく、「その『笛』へ向かって」(という旋律、あるいはその歌い出しで始まる曲の旋律)あるいは七十人訳に従うと「その相続へ向かって」(という旋律、あるいはその歌い出しで始まる曲の旋律)ではないだろうか。

IV. ハーリール

最後に、ヘブル語聖書において6箇所⁽¹²⁾に現れるハーリールを見直してみたい。

この語は、新改訳第3版において、いずれも「笛」と訳されている。

「その後、ペリシテ人の守備隊のいる神のギブアに着きます。あなたがその町に入るとき、琴、タンバリン、笛、立琴を鳴らす者を先頭に、高き所から降りて来る預言者の一団に出会います。」(Ⅰサムエル記10:5)

「民はみな、彼のあとに従って上って来た。民が笛を吹き鳴らしながら、大いに喜んで歌ったので、地がその声で裂けた。」(Ⅰ列王記1:40)

「彼らの酒宴には、立琴と十弦の琴、／タンバリンと笛とぶどう酒がある。／彼らは、主のみわざを見向きもせず、／御手のなされたことを見もしない。」(イザヤ書5:12)

「あなたがたは、祭りを祝う夜のように歌い、／主の山、イスラエルの岩に行くために、／笛に合わせて進む者のように心楽しむ。」(イザヤ書30:29)

「それゆえ、私の心はモアブのために笛のように鳴り、私の心はキル・ヘレスの人々のために笛のように鳴る。彼らの得た富も消えうせたからだ。」(エレミヤ書48:36)

他に、新共同訳、旧約聖書翻訳委員会訳、関根新訳においてもほとんどが「笛」と訳されている。⁽¹³⁾ 上記の箇所からもわかるように、この語は神殿礼拝以外の場面において現れている。

七十人訳では上記の6箇所のうち5箇所でアウロス *αυλος* “flute” (Bauer 2000, 151), “pipe, flute, clarinet” (Liddell and Scott 1940, 277) と(Ⅰサムエル10:5, イザヤ5:12, 30:29, エレミヤ48:36は2回)、残る1箇所ではコロス *χορος* “(choral) dance, dancing” (Bauer 2000, 1087), “dance” (Liddell and Scott 1940, 1999) と訳されている(Ⅰ列王記1:40)。

この楽器は、古代エジプトによく見られるV型の双管あるいは単管の管鳴楽器と考えられている一方で (Braun 2002, 13-14)、ミッチェルは仮の認定としてはそれがもっともらしいと述べながらも蓋然性の判定は星****のうち*としている (Mitchell 1992, 131)。双管の笛自体の考古学的な証拠は古代オリエントにおいてははっきりしており (小板橋 1998, 73; Braun 2002, 133-145)、例えばアシュドド出土の粘土製の台 (前11世紀後期-10世紀初期) には5人の楽師があり、そのうち双管の笛を吹く大小2人の像が現れることは当時その地で用いられていたことの証拠と言えよう。

とはいえ、もし双管の笛の類いであるとしても、ブラウンが様々な訳語を挙げて説明しているように (Braun 2002, 13)、リードが2枚のオーボエ属 (古代エジプトのウェジェン *w(3)dn* あるいは *wḏni*) であったか、1枚のクラリネット属 (古代エジプトのメメト *mnt*。現代であれば「ズンマーラ」あるいは「マスフーラ」) であったかも不明であるし、リードがないフルート属 (古代エジプトのマアト *m3t*。現代であれば「ナーイ」),

あるいはもしかしたら木管楽器の総称ではないかという可能性も指摘されている。

ただし、ギリシア語のアウロスを“flute”と訳すと誤解を招くことになるかもしれない。アウロスは後に述べるように、「鋭い音色を響かせ」る楽器であり（マニケ 1996, 210, 48）, “flute” から想像されやすい柔らかな音色ではなく、日本であればチャルメラのようなどちらかというと騒々しい音色と考えられるからである。

V. なぜ笛の登場が少ないのか

これまで、ヘブル語聖書において「笛」「フルート」と訳されている3つの語すなわちウーガープ、ネヒーロート、ハーリールを見てきた。そのうち、ハーリールはこれまでも何らかの種類の笛と見なされており、七十人訳その他からもそのように考えることがもっともらしいけれども、登場する回数はわずか5回である。ウーガープとネヒーロートについては笛の類であるかどうかさえも確実とはいえないことも見てきた。ここでは、ヘブル語聖書においてこのように笛の類の出現回数が少ない理由を考察してみたい。

まず、笛に関する記述が単にないということであるが、当該地域で文書資料もしくは文書を伴う考古学的な証拠が発見されない限り、検証することはできないだろう。

次に、第Ⅱ章でも見たように、古代イスラエルの神殿礼拝においては歌うことが基本であり、楽器の伴奏が付く場合には歌いながら笛を吹くことはできないために（小板橋 1998, 57参照）、笛の類いが使われなかったのではないかということである（管鳴楽器の中でも合図として用いられたラッパや角笛は除く）。

また、古代イスラエルの南隣のエジプトを見てみると、「オーボエ」と訳されるウェジェン *w(3)dn* というダブルリードの双管の笛は、「新王国時代の初め以来、オーボエはもっぱら女性の楽器」（ヒックマン 1986, 116, 114）であった。古代シリア・パレスチナにおいて出土している前12世紀から7世紀の双管の笛を吹く小像の大半も女性である（Braun 2002, 133-145）ことから、少なくともこの楽器は女性が吹くとされるものであって、男性の音楽家だけで構成される神殿礼拝の演奏家の楽器として登場しないということかもしれない。

さらに、「オーボエ」が女性の楽器だったということだけでなく、エジプトにおいては「道楽者の書記にあてた非難」において「貴官は笛 [= *w(3)dn* すなわちオーボエ] に合わせて歌い、ワル（という）横笛に合わせて歌を口ずさみ、竖琴に合わせて吟誦し、ネチェク（木楽器）に合わせて歌うことを教わった。」（『古代オリエント集』644。マニケ 1996, 197, 200, 226も参照）と言われていた。さらに「あきらかにエロティックな、あまり名誉とはいいがたいことに結びつけられているせいもあって、尊ばれることはな

かったようである」(マニケ 1996, 226)とされている。

エロティックなものと結びつく楽器は、「オーボエ」だけではない。「古今を問わず、ほとんどの文明において、音楽と愛とは切り離すことができない。またそれは、下賤な売春宿から神聖な神殿まで、場所も問わない。古代エジプトの書記養成学校の教師が引き合いにだしたオーボエとリラの2つの楽器は、一般的にはきわめて上品な場面にもちいられていたが、同時にエロティックな連想をさそうものでもあったようだ」(マニケ 1996, 197-198)とされているように、オーボエだけでなく古代イスラエルでもよく用いられているリラも含まれている⁽¹⁴⁾。

しかしながら、「オーボエ」のような双管の笛とエロティックなこととの結びつきは、リラよりもはるかに強かったように思われる。同じ東地中海文化圏の一部とも言える古代ギリシアにおいて、ヘブル語のハーリールの訳語としてあてられている双管の笛のアウロスの描写を見てみると、ギリシアにおいてアウロスは先史時代知られている楽器で(ヴェーグナー 1985, 17),「とりわけエロティックなことに関連してよく知られている。たとえばアウロスの響きは、頭部と性器を備えたある種のヘルメス柱像や、踊るサテュロスの男根を刺激するとされた」(マニケ 1996, 210) 楽器である。ギリシアから出土している赤絵式の壺絵において、アウロスを吹いているのは多くの場合ヘタイラと呼ばれる遊女で(ヴェーグナー 1985, 13, 14), アテナイ人はアウロスを嫌悪しており外国人やボイオティア人に吹かせたと言われている(ヴェーグナー 1985, 11)。また、「アウロスの演奏は肉体の尊厳と道徳性を破壊するとされた」(パーカー 1996, 61)とも言われている。一方、リラについては「リラとキタラは、閨房で娯楽として音楽が奏でられている場面を描いた絵に時おり登場するが、ハーブに比べればはるかにまれである」(ヴェーグナー 1985, 13)と言われており、アウロスとは異なった扱いがされている。

以上のことから、ヘブル語聖書において「オーボエ」やアウロスのような笛の登場が少ないのは、神殿礼拝で用いる楽器として歌いながら使うのが難しかったということとともに、エジプトやギリシアにおいては女性が吹く楽器であって(古代イスラエルでの考古学的証拠も)、さらには両地域においてそれらの楽器がエロティックなものと結びついているなどの良くないイメージが強く、古代イスラエルにおいても同様に避けられたからではないかと説明できるのではないだろうか。

VI. 終わりに

本稿では、ヘブル語聖書に現れる「笛」「フルート」と訳されている3つのヘブル語を再検討した。

そのうち、4回（死海文書も含めると5回）現れるウーガーブは伝統的に「笛」と解釈されているけれども、それを積極的に支持する事柄が少ないことを見た。一方で、対語としてもっぱら弦鳴楽器の立琴（キンノール）や正体不明ながらも弦鳴楽器と考えられるミニームが現れることや、七十人訳ではオルガノンやブサルモスのように特定の楽器を示していない語で訳される一方で創世記においてはキタラと訳されることから、弦鳴楽器の方をより支持しているように思われる。

次に、1回しか現れない（エル＝ハ・）ネヒーロートは、伝統的に「フルート」（新改訳）、「笛」（新共同訳等）と訳されてはいる一方で、七十人訳では楽器とは考えにくい「相続」と訳されており、管鳴楽器であることが自明ではない。また、前置詞としても通常楽器と共に起るのではなく、このみエルが使われており、少なくとも楽器「を使って」と考えることは難しいように思われる。1つの提案として、エル＝ハ・ネヒーロート全体が「笛／相続へ向かって」という未知の歌の旋律かその歌い出しを示しているのではないだろうか。

また、5回現れるハーリールは、七十人訳において「アウロス」として訳されていることから、古代イスラエルにおいても考古学的証拠として現れる双管の笛と見なすのが最も妥当であろう。

さらに、ヘブル語聖書において笛の類の出現回数が極めて少なく、特に神殿礼拝の楽器として含まれていない要因として、1) 単に笛に関する記述がない、2) 神殿礼拝では歌が主体であり歌いながら笛は吹けない、といったことの他に、アウロスのような双管の笛は3) エジプトやギリシアではもっぱら女性が吹く楽器であり、さらには4) 両地域においてエロティックなことや陶酔に他の楽器よりも強く結びつく楽器とされていることから、古代イスラエルにおいて避けられたのではないかということを指摘した。古代イスラエルにおいては、楽器の使われ方においても、近隣のエジプトなどとは一線を画すことによってその独自性を保っていたのではないだろうか。

注

- (1) 本稿は、日本オリエント学会第50回大会（2008年11月2日、筑波大学）における研究発表に加筆修正したものである。エジプト語の資料に関して、永井正勝氏（筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程）からご教示いただきました。また査読者および編集委員会の方々からも有益なコメントを頂きました。ここに記してお礼申し上げます。
- (2) 本稿では、西洋楽器の分類ではなく、20世紀の初めにホルンボステルとザックスがより普遍的な楽器の分類法を求めて提唱した、発音原理に基づく4分類法（俗に「HS分類法」と言われる）を用いる。

- (3) 創世記4:21に関して、タルグム・ネオフィティの語注に見られるウーガーブを“harp”とする見解もある (Sokoloff 2002, 398)。
- (4) オCONNELLはオルガノンを“panpipe” (O’Connell 1997, 335) としているが、ギリシア語の上述の辞書で見たようにオルガノンにはそのような意味はないと思われる。
- (5) ネーベルは、大型のリラという説の他にハーブという見解もあるが、ヘレニズム以前の古代イスラエルの地においてハーブの考古学的な証拠は今のところ見られない (Braun 2002, 23)。
- (6) ヘブル語と近い関係にあるウガリト語には、弦鳴楽器として立琴 (*knr*。時に神名として)、膜鳴楽器として太鼓またはタンバリン (*tp*。他に *mrqst* “dance-drum” も)、体鳴楽器としてシンバル (*mšlt*) と拍子木 (クラッパー) あるいはカスタネット(?) (*mrqd*) が現れる一方で、管鳴楽器として *tlb* “flute” が見られる (del Olmo Lete and Sanmartín 2003, 905)。小板橋 (1998, 71-73) によれば、上記の辞書において“flute”と訳されている *tlb* は、アウロスのような単管もしくは双管の楽器とのことである。
- (7) いわゆる「グレゴリオ聖歌」だが、最近の研究ではこれは教皇グレゴリウス I 世 (後594-640年在位) の名前を利用したニックネームであり、彼はローマ典礼とローマ聖歌への統一運動の号令をかけたけれども、この聖歌集を編纂したわけではなく、聖歌の大半は後9世紀以降のものと考えられている (例えば金澤 2005, 44-47参照)。
- (8) 一例として、J. S. バッハの《マタイ受難曲》において〈血潮したたる主のみかしら〉で知られるコラールは、H. L. ハスラーの恋愛歌〈我が心は千々に乱れ〉の旋律に P・ゲルハルトが受難詩〈血潮したたる主のみかしら〉をあてはめたコントラファクトゥムである。
- (9) しかしながら、複数語尾ではないオートについては懐疑的な意見もある (Joüon and Muraoka 2006, 243)。
- (10) 他に、「のために」(旧約聖書翻訳委員会訳)「とともに」(関根新訳)と訳されている。
- (11) 詩篇80篇の表題にエル＝ショーシャンニーム *‘el-šōšannim* 「百合へ (向かって)(?)」(私訳) というのが現れ、ショーシャンニームをアッカド語のシュッシュ *šuššu* と結びつけて「6弦のもの」(Koehler and Baumgartner 2001, 1455) とする推測もある。
- (12) エゼキエル28:13においても、新改訳では「あなたは神の園、エデンにいて、／あらゆる宝石があなたをおおっていた。／赤めのう、トパーズ、ダイヤモンド、／緑柱石、しまめのう、碧玉、／サファイヤ、トルコ玉、エメラルド。／あなたのタンバリンと笛とは金で作られ、／これらはあなたが造られた日に整えられていた。」のように「笛」(*naqābēkā* < *neqeb*) と訳される語が現れるが、新共同訳では「お前は神の園であるエデンにいた。あらゆる宝石がお前を包んでいた。ルビー、黄玉、紫水晶／かんらん石、縞めのう、碧玉／サファイヤ、ざくろ石、エメラルド。それらは金で作られた留め金で／お前に着けられていた。それらはお前が創造された日に整えられた。」のように「留め金」と訳されている。対語として現れる *tuppēkā* (< *tōp*) も、「タンバリン」(新

改訳)と訳される一方で新共同訳では訳されていないようであり、楽器なのか宝石なのか議論がある。

- (13) 旧約聖書翻訳委員会訳では、イザヤ書5:12は「縦笛」と訳されている。
- (14) エロティックなものと深く結びつく楽器としては他に、エジプトではシストルム、ハーブ、とりわけリュートが(マニケ 1996, 197-215), ギリシアではハーブが(ヴェーグナー 1985, 13) 指摘されている。

参考文献

- Abegg Jr., M., J. E. Bowley, E. M. Cook and E. Tov 2003: *The Non-Biblical Texts from Qumran*, The Dead Sea Scrolls Concordance 1, Leiden, Boston: Brill.
- Abegg, Jr., M., P. Flint and E. Ulrich 1999: *The Dead Sea Scrolls Bible. The Oldest Known Bible, Translated for the First Time into English*, San Francisco, Calif.: Harper San Francisco.
- Bauer, W. 2000: *A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature*, 3rd ed. revised and edited by Frederick William Danker, Chicago: University of Chicago Press.
- Bauer, H. and P. Leander 1991: *Historische Grammatik der hebraischen Sprache des alten Testaments*, Olms Paperbacks 19, Hildesheim, Zürich, New York: Georg Olms.
- Braun, J. 2002: *Music in Ancient Israel/Palestine. Archaeological, Written, and Comparative Sources*, translated by D. W. Stott, The Bible in Its World, Grand Rapids, Michigan: W. B. Eerdmans. (*Die Musikkultur Altisrael/Palästinas. Studien zu archäologischen, schriftlichen und vergleichenden Quellen*, Orbis Biblicus et Orientalis 164, Schweiz, Universitätsverlag Freiburg/Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1999.)
- Briggs, C. A. and E. G. Briggs 1906-1907: *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms*, The International Critical Commentary, Edinburgh: T. & T. Clark.
- Clines, D. J. A. 1993-: *The Dictionary of Classical Hebrew*, Sheffield: Sheffield Academic Press.
- Delitzsch, F. n.d.: *Psalms*, Commentary on the Old Testament 5, Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans.
- C. Roth (ed.) 1971: *Encyclopaedia Judaica*, Jerusalem: Keter Publishing House.
- Even-Shoshan, A. 1989: *A New Concordance of the Bible: Thesaurus of the Language of the Bible*, 2nd edition, Jerusalem: Kiryat Sefer.
- García Martínez, F. and E. J. C. Tigchelaar 1998: *The Dead Sea Scrolls*. study edition, Leiden: Brill.
- Jones, I. H. 1992: "Musical Instruments," in D. N. Freedman *et al.* (eds.), *The Anchor Bible Dictionary*, Vol. IV, New York: Doubleday, 934-939.
- Joüon, P. and T. Muraoka 2006: *A Grammar of Biblical Hebrew*, 2nd edition, Subsidia Biblica 27, Roma: Editrice Pontificio Istituto Biblico.

- Klein, E. 1987: *A Comprehensive Etymological Dictionary of the Hebrew Language for Readers of English*, New York: Macmillan Publishing Company.
- Koehler, L. and W. Baumgartner 2001: *The Hebrew and Aramaic Lexicon of the Old Testament*, study edition, translated by M. E. J. Richardson, Leiden, Boston, Köln: Brill.
- Kraus, H. J. 1988: *Psalms 1-59: A Commentary*, Minneapolis: Augsburg Publishing House.
- Lewis, C. T. and C. Short 1879: *A Latin Dictionary, Founded on Andrews' Edition of Freund's Latin Dictionary*, revised, enlarged, and in great part rewritten by Charlton T. Lewis and Charles Short, Oxford: Clarendon Press.
- Liddell, H. G. and R. Scott 1940: *A Greek-English Lexicon*, new (9th) edition., Oxford: Clarendon Press.
- Mitchell, T. C. 1992: "The Music of the Old Testament Reconsidered," *Palestine Exploration Quarterly* 1992 July-September, 124-143.
- Montagu, J. 2002: *Musical Instruments of the Bible*, Lanham, Md., & London: Scarecrow Press.
- O'Connell, R. H. 1997: "ûgāb," in W. A. vanGemeren *et al.* (eds.), *New International Dictionary of Old Testament Theology and Exegesis*, Grand Rapids, Michigan: Zondervan, 334-335.
- del Olmo Lete, G. and J. Sanmartín 2003: *A Dictionary of the Ugaritic Language in the Alphabetic Tradition*, 2 Parts, Handbook of Oriental Studies 1, The Near and Middle East 67, Leiden, Boston: Brill.
- Sokoloff, M. 2002: *A Dictionary of Jewish Palestinian Aramaic of the Byzantine Period*, 2nd edition, Dictionaries of Talmud, Midrash, and Targum 2, Publications of the Comprehensive Aramaic Lexicon Project, Ramat-Gan: Bar Ilan University Press/Baltimore: Johns Hopkins University Press.
- ヴェーグナー, マックス 1985:『ギリシア』人間と音楽の歴史 第Ⅱシリーズ: 古代音楽・第4巻, 音楽之友社.
- 金澤正剛 2005:『キリスト教音楽の歴史: 初代教会からバハまで』日本キリスト教団出版局.
- 菊池純子 2003:「神殿礼拝における楽器の機能」『礼拝音楽研究』3, 96-99.
- 旧約新約聖書大事典編集委員会(編) 1989:『旧約新約聖書大事典』教文館.
- 旧約聖書翻訳委員会 2004-2005:『旧約聖書(全4巻)』岩波書店.
- 黒沢隆朝 2005:『図解 世界楽器大事典』雄山閣.
- 小坂橋又久 1998:『古代オリエントの音楽: ウガリトの音楽文化に関する一考察』リトン.
- 杉勇他訳 1978:『古代オリエント集』筑摩世界文学大系1, 筑摩書房.
- 関根正雄 1993-1995:『新訳 ヘブル語聖書(全4巻)』教文館.
- 月本昭男 2003:『詩篇の思想と信仰Ⅰ: 第1篇から第25篇まで』新教出版社.

- パーカー, アンドルー 1996:『前古典期ギリシアにおける＜芸術＞としての公開の音楽』
ジェームズ・マッキノン (編)『西洋音楽の曙 古代・中世』西洋の音楽と社会①, 音楽之友社, 51-73.
- 秦剛平 2002:『七十人訳ギリシア語聖書: I 創世記』河出書房新社.
- ヒックマン, ハンス 1986:『エジプト』人間と音楽の歴史 第IIシリーズ: 古代音楽・第1巻, 音楽之友社.
- マニケ, リーサ 1996:『古代エジプトの音楽』弥呂久.
- 水野信男 1997:『ユダヤ音楽の歴史と現代』アカデミア・ミュージック.

[付記] 初校の段階で次の七十人訳の辞書を入手し, 該当する語のギリシア語の意味について確認したことを付け加えておきたい。Muraoka, T. 2009: *A Greek-English Lexicon of the Septuagint*, Louvain, Paris, Walpole, MA: Peeters.